

伝飛鳥板蓋宮跡から見た二至二分の「日の出」

藤 田 富士夫

I. はじめに

『万葉集』に「明日香の神奈備山」を詠んだ歌がある。神奈備山とは古代人が、神が特別に宿っていると考えていた三角形をした山のことである。奈良県高市郡明日香村の地に神奈備山があったのは次の万葉歌から分かる。

○春されば 花咲きををり 秋付けば 丹のほにもみつ 味酒を 神奈備山の 帯にせる
明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の うちなびく 心は寄りて 朝露の 消なば
消ぬべく 恋ひしくも 著くも逢へる 隠り妻かも (巻13・3266)

○三諸の 神奈備山ゆ との曇り 雨は降り来ぬ 天霧らひ 風さへ吹きぬ 大口の
真神の原ゆ 思ひつつ 帰りにし人 家に至りきや (巻13・3268)

ここに掲げた歌には「神奈備山の 帯にせる 明日香の川の」(巻13・3266)とあって、神奈備山が明日香にあったことを示している。また「三諸の 神奈備山ゆ」を初句とする「大口の 真神の原ゆ」(巻13・3268)は、今日の飛鳥寺の付近を指すのが定説となっている。

このように、明日香には「三諸の神奈備山」が存在しているのであるが、今日その所在が不明となっている。平安末期に成立した『日本紀略』の天長六年(829)三月十日条には「大和國高市郡賀美郷甘南備山の飛鳥社を同郡同郷鳥形山に遷す。神の託宣に依るなり」とある。天長六年に「鳥形山」へ「飛鳥社」が遷宮されたのである。今日の明日香村大字飛鳥に鎮座する飛鳥坐神社の小丘陵が「鳥形山」と称されていて、当地が平安朝以降、明日香の神奈備山に比されるところとなった。遷宮された頃の宮都は平城宮であった。

この遷宮や遷都が関係して、「明日香の神奈備山」の奉斎が薄れてしまったようだ。これまで多くの万葉学者や古代史学者が所在について検討を重ねてきた。「雷丘説」、「甘檉丘説」、「ミハ山説」、「南淵山説」、「川原寺裏山説」、「岡寺山説」などが呈されてきた。

筆者は、現地の景を重視する実景論的視点にたつて山容が桜井市の「三輪山」と相似する岡寺山説を支持し、いくらかの考察を重ねてきた。なお拙論については別稿をご参照頂ければ幸いである⁽¹⁾。

さて、筆者はここ数年来、明日香村の史跡・伝飛鳥板蓋宮跡からの東方の景を定点観測

してきた。2015年には二至二分の「日の出」を観測した。本稿では、それを通して見えてきた明日香の歴史的個性の若干について私見を呈するものである。

Ⅱ. 二至二分の「日の出」の観測

(1) 定点観測の地点

定点観測の位置として選んだのは史跡・伝飛鳥板蓋宮跡のⅢ—B期（飛鳥浄御原宮）を象徴する大井戸の西側に隣接する内郭北東隅建物（SB6405）の南西隅である（第1図・写真1）。この建物跡は1972年に整備され、現地には立柱が「建物半立体」で復元されている⁽²⁾。

ただし、この建物について「内郭の北半に位置する長廊状建物 SB6205 や井戸周辺の建物 SB6010・6405 などは、実際問題として、Ⅲ—A期、Ⅲ—B期をつうじて存続したのか、あるいは、どちらかの時期に存続したのかは定かでない」⁽³⁾とされているが、ここでは仔細は問わないで論じてみたい。

この位置は、『飛鳥宮跡保存活用検討報告書』によれば、「A内郭ゾーン」で、「かつての場の機能」としては、「政治、儀式、内裏的空間」が想定され「飛鳥宮跡の中核地区」であったとされている。加えて当該地は「天皇の私的空間」と位置づけられている⁽⁴⁾。

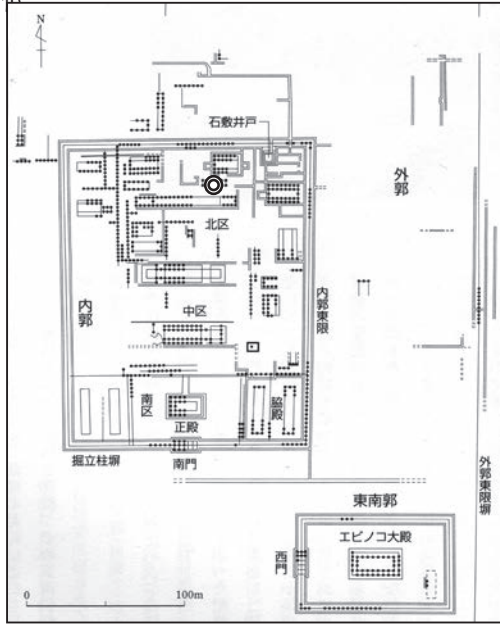
さて、私は岡寺山が飛鳥の神奈備山であったと考えている。奈良時代の傑僧・義淵が建立したとされる岡寺の背後にある標高339.5mをピークとする笠形の山である（写真2）。岡寺山は伝飛鳥板蓋宮跡の観測地点の真東にあって、この地点でのランドスケープの主要位置を成している。最初は2015年3月21日（春分）にピークからの「日の出」の観測に成功した⁽⁵⁾。これに力を得て年間を通して二至二分の観測を行う事とした。

(2) 二至二分の「日の出」の位置

史跡・伝飛鳥板蓋宮跡の観測地点から見た二至二分の「日の出」は、春分・秋分では真東から、そして夏至では北へ約30度（E-30°-N）振った位置から、冬至では南へ約30度（E-30°-S）振った位置から昇った（第2図、写真3・4）。次に、個別の様子を記しておきたい。カメラは「Nikon D50」を使用し、標準望遠レンズ「Nikon AF-S NIKKOR 16-85mm 1:3.5-5.6G ED」を用いた。

春分の日の出 2015年3月21日に観測を行った。春分は、二十四節気の一つで太陽が真東（春分点）から昇り、昼と夜が同じ長さになる日である。早朝の5時40分に観測地点に立った。この日は曇り空で、明るさの兆しはあるが山肌は霞んでいた。辺りには誰もいない。長い静寂と薄明りが続いた。6時58分、岡寺山の頂から球点を成した太陽が出現した（写真5）。「飛鳥宮」の日の出の瞬間である。それは確かに、藤本山よりいくらか

低



●—飛鳥宮跡Ⅲ期遺構のようす

第1図 写真撮影ポイント

(◎の位置から東を望む)



写真1 伝飛鳥板蓋宮跡の撮影ポイント
(中央・左の人物位置から正面の岡寺山—神奈備山—を仰ぐ)

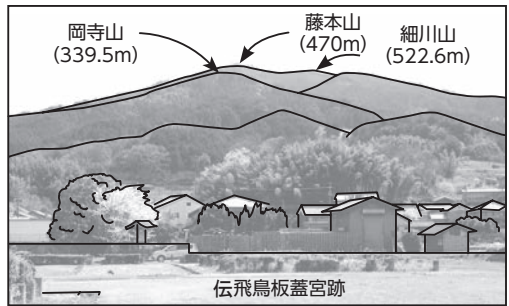
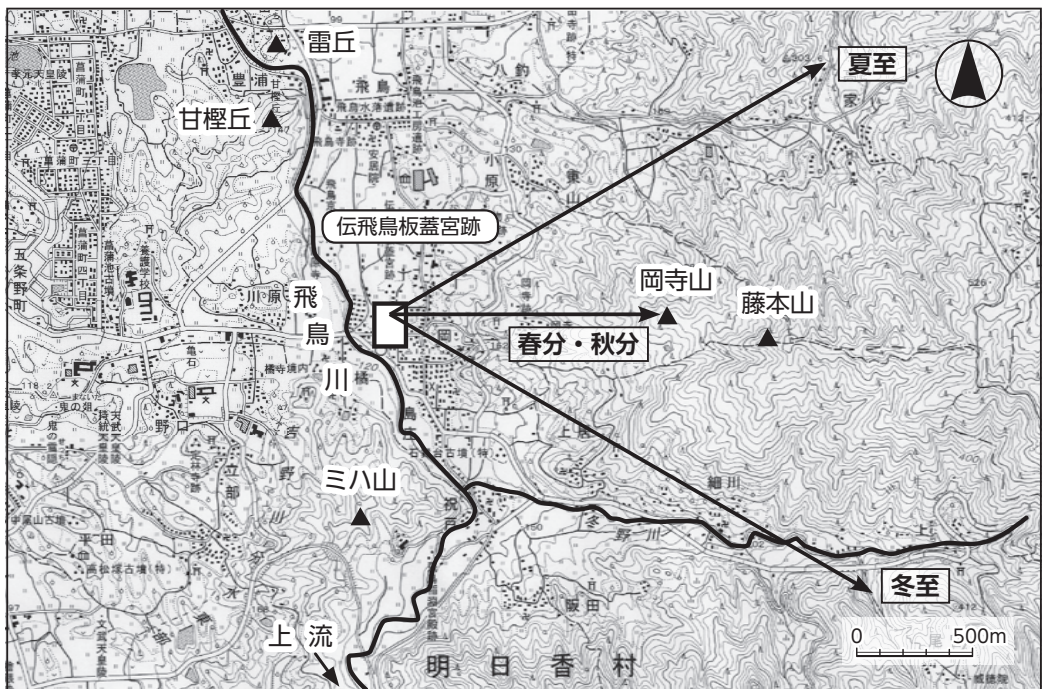


写真2 伝飛鳥板蓋宮跡から見た東方の山
景解説



第2図 伝飛鳥板蓋宮跡から見た二至二分の日の出の方向



写真3 伝飛鳥板蓋宮跡から見た東方の山々



写真4 伝飛鳥板蓋宮跡から見た二至二分の日の出 (合成)

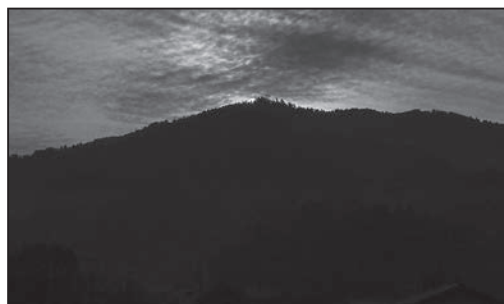


写真5 岡寺山の頂から日の出の瞬間
(2015年3月21日、6:58)



写真6 岡寺山から藤本山の頂へ太陽が斜行して昇る
(2015年3月21日、6:59)

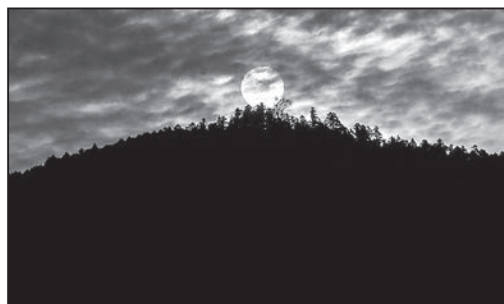


写真7 藤本山の頂へと太陽が移動する
(2015年3月21日、7:01)



写真8 高家地区のコル状稜線からの日の出
(2015年6月22日、5:15)

低位で北寄りに頂きを有する岡寺山からであった。6時59分には、藤本山の北稜線に沿って斜行して昇った(写真6)。7時00分には藤本山の頂に達し、7時01分には雲間にありながら太陽は藤本山の真上から陽光を放っていた(写真7)。まもなく太陽は厚い雲海に入り、7時06分には、その姿を完全に隠した。この日の明日香村は終日、曇空であった。

夏至の日の出 2015年6月22日に観測を行った。夏至は、二十四節気の一つで太陽がもっとも北にかたよる時で、昼が最も長く、夜が最も短い日である。早朝の4時50分に観測地点に立った。空一面を白い雲が覆っている。岡寺山の山肌からはガスが上気している景がもやっている。山景は不鮮明さを示すが、観測地点の近域の視界は不思議と明るい。4時55分頃、岡寺山の頂きの雲が切れ始め、雲間から青空が望見できる。5時00分、岡寺山の山頂より以南に青空が広がる。一方、日の出が想定される「高家地区のコル状稜線」を中心として雲海が天空一帯を覆う集塊現象を見せた。その集塊は集まっては消え、めまぐるしく転回しているかのようであった。このままでは、日の出は見られないのではないかと危惧された。その途端5時15分に高家地区のコル状稜線から球状を成した太陽が昇ってきた(写真8)。5時16分には、ほぼ真上に昇った(写真9)。夏至の太陽は日差しが強烈である。5時17分には肉眼での直視は厳しくなった(写真10)。この後、太陽と雲がせめぎ合っていたが、6時22分に太陽は雲に飲み込まれてしまった。この日、明日香村は晴天ではあったが、白い雲がかかり再び太陽を見ることは出来なかった。

秋分の日 2015年9月23日に観測を行った。秋分は、二十四節気の一つで太陽が真東(秋分点)から昇り、昼と夜が同じ長さになる日である。6時20分に観測地点に立った。空は白く輝いている。まだ薄暗い。山肌にはややガスがかかっている。6時33分には岡寺山の山頂が笠を差したかのように周囲よりは一際明るさを増した。6時40分には岡寺山の頂から日の出が認められた(写真11)。その球体は春分の時よりは、いくらか小さくそしてゆっくりと昇っているように感じられた(写真12)。そのまま斜行して6時44分には藤本山の頂へと到り、明日香村が朝を迎えた(写真13)。この時、岡寺山の南側の稜線が鮮明に浮かび上がる現象が認められた。この日の明日香村は、終日、晴天であった。なお春分とは同一個所からの日の出であったが、18分近くも早い日の出であった。

冬至の日 2015年12月22日の冬至に観測を行った。冬至は、二十四節気の一つで太陽がもっとも南にかたよる時で、夜が最も長く、昼が最も短い日である。この日の奈良県明日香村の3時間毎の天気予報(dNHK)では、朝9時までは曇り、それ以降は晴天の予報が出ていた。7時30分に観測地点に立った。伝飛鳥板蓋宮跡は朝明けで心地よさが漂っているが、東の山域の天頂には厚い雲海が被さっていて、太陽の気配を感じさせるものはなかった。今日の日の出は無理かもしれないとの思いがよぎる。7時52分、一気

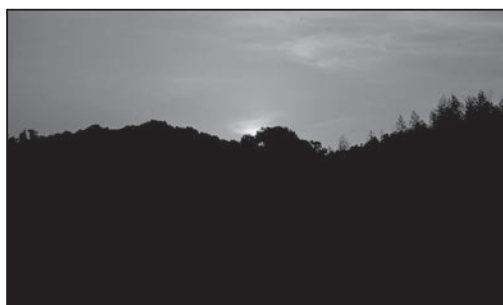


写真 9 高家地区のコル状稜線からの日の出 (2015年6月22日、5:16)



写真 10 高家地区のコル状稜線からの日の出 (2015年6月22日、5:17)



写真 11 岡寺山の頂から日の出の瞬間 (2015年9月23日、6:40)

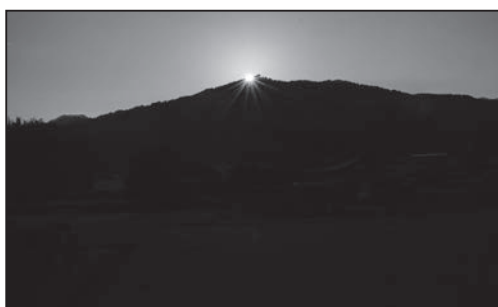


写真 12 岡寺山の頂から太陽が昇る (2015年9月23日、6:41)



写真 13 岡寺山の頂へと太陽が移動し、岡寺山の山容が浮かび上がる (2015年9月23日、6:44)

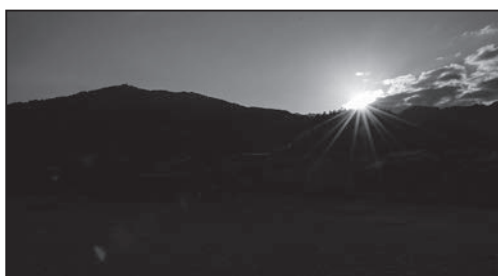


写真 14 冬野地区のコル状稜線からの日の出 (2015年12月22日、7:50;12)



写真 15 冬野地区のコル状稜線からの日の出 (2015年12月22日、7:50;16)



写真 16 冬野地区のコル状稜線からの日の出 (2015年12月22日、7:51)

に北方の天空が開けてきた。岡寺山の北方には雲一つない青空が、南方には雲海がよどんでいる。岡寺山の頂きを境として綺麗な分離線が走っている。日の出が予測される冬野地区の山稜は、まだ厚い雲に覆われている。7時50分、「冬野地区のコル状稜線」をふさいでいた雲海を押し開けて鮮明な球体が姿を現した（写真14）。その4～5秒後には、完全に太陽が稜線上に移動した（写真15）。7時51分には強い光線を放って周囲が朝の陽ざしとなり、一気に山域の雲は消失した（写真16）。この日は終日、明日香の天空には雲一つない青空が広がっていた。

(3) 実景観測を行って

2015年の春分、夏至、秋分、冬至に運よく伝飛鳥板蓋宮跡からの「日の出」を観測することが出来た。それは幸運であった。冬至の事例で言えば、前日までは雨天や曇り、翌日にはもう雨天模様とする予報が出ていた。たまたま12月22日の9時—12時が晴天予報であったのでいくらかの期待を込めて遠方（筆者は富山県に住んでいる）からの明日香行を決行した。

春分に、太陽が東から昇るのは当然の事であるが、実際にどのように昇るかはやはり観測するしかない。実景観測では雲の移動や、山肌の見え方など微妙な情景を肌で感じる事ができた⁽⁶⁾。

明日香の地における「日の出」は、山脈の高度や太陽の角度が関係していると思われるのであるが、山稜の雲海とのせめぎ合いがダイナミックである。これは少なくとも私が住んでいる富山地域では体験できない情景であった。また春分と夏至では、早朝の「日の出」は見られたが、たちまちに曇の広がる空となった。かかる現象は、私には奇瑞とも映る感動を伴った体験であった。「はじめに」で示した『万葉集』（巻13・3268）の歌は、神奈備山の天象の急変現象を詠んでいる。この歌は、かかる明日香の風土性を良く示している。私には、机上では味わえない実感をもって歌景を理解できるようになった。

もちろん筆者が明日香の神奈備山と想定している岡寺山からは、春分と秋分に正しく「日の出」を認めるのであるが、それは背後にある藤本山との相乗効果をもって現れた。岡寺山の北稜線は、高家地区のコル状地勢をもって北端と成す。南稜線は冬野地区のコル状地勢をもって南端と成す。かかる高家地区と冬野地区のコル（鞍部）状稜線から夏至と冬至の「日の出」が認められた。伝飛鳥板蓋宮跡からは、それぞれ南北方角約30度を計る位置である。推考すれば、コルとコルに囲まれた三角形をした山稜が明日香の神奈備山の領域であり、また狭義の明日香の範囲を示す指標となろう。この領域が、神奈備山が直接に守護する範囲であった可能性が見えてきた。

Ⅲ. 神奈備山の「日の出」からの寸考

(1) 「明日香」名称と神奈備山

神奈備山（岡寺山）を伝飛鳥板蓋宮跡のランドスケープに据えると、見えて来るのは二至二分の太陽運行である。ここに明日香の名称の由来について、和田萃氏や辰巳和弘氏の所見が想起される。和田氏は、『古事記』（履中段）が、近飛鳥と遠飛鳥の地名のいわれを「アス（明日）」+「カ（所）」、すなわち明日に結び付け、アスカを「翌日に到り着く所」としていることに注目する。このことから「アス」は翌日の早朝の意であり、当時は早朝四時頃に日付が変わったとし、アスカには「朝のイメージが濃い」、「早朝に鳥が群れ飛ぶアスカ」と、その由来に触れている⁽⁷⁾。

また、辰巳和弘氏は、アスカの地名の原義について「王権にとっての『大槻』の象徴性を追求する私は、『大槻』の梢＝天球を運行する太陽（日）が出る方角や所という意味の、『あす（あした・あさ）』+『か（処）』がそれではないかと考える」としている⁽⁸⁾。

かかる指摘はアスカの地名を考える上で興味深い。伝飛鳥板蓋宮跡（飛鳥宮）からの二至二分の「日の出」が、飛鳥王朝が神奈備山（岡寺山）を起点として展開しているのを実景として確認できた今、一層の実感を伴って受け入れることが出来るのである。

このことは、また伝飛鳥板蓋宮跡が神奈備山を真東にする位置に周到に選定されたことをも意味する。けだし「明日香」の地名は単に「東の方角から太陽が昇る」といった常の太陽運行から着想されたものではないだろう。明日香の神奈備山は「神が宿る聖なる山」としての本義に加えて、二至二分の「日の出」がより重要な意義を有していたと思われる。二至二分は、小林達雄氏が「縄文ランドスケープ論」で説いたように縄文カレンダーとして「縄文人の知性に時間の概念が定着する重要なきっかけ」であったと意義づけられている⁽⁹⁾。

これから類推すれば、飛鳥王権にとって神奈備山の二至二分は視覚で認識できる四季を告げる「飛鳥カレンダー」であったと言えそうである。かかる「飛鳥カレンダー」（暦）は、「時」の運行と深く関わっている。もっとも王権が時を支配する体制は、天智天皇十年（671）夏四月に「漏刻を新台ろうこく あたらしきうてなに置き、始めて候時ときを打つ。此の漏刻は、天皇の皇太子すめらみこと ひつぎのみこに為しましし時に、始めて親みずから製造つくれる所なり、云々」⁽¹⁰⁾とあるので天武朝を遡るのは確実である。天武天皇にあっては飛鳥の神奈備山の最後の祭祀と関わった最後の天皇であった可能性が説かれている⁽¹¹⁾。天武天皇は、漏刻と「飛鳥カレンダー」の両方を抱いて、時を感じとっていたのかもしれない。

結果論となるが、筆者が観測地点に選んだ史跡・伝飛鳥板蓋宮跡からの飛鳥の神奈備山のランドスケープは、正しく「飛鳥カレンダー」を太陽運行で刻むに相応しい場所であった。再論するが、この場所は史跡整備のエリア区分で「A-2内郭北区画エリア」と称さ

れている。性格について『飛鳥宮跡保存活用検討報告書』は、「内郭南エリアとは堀で画され、天皇の私的空間であり、後の内裏的な地区」や、「天皇の私的空間として、正殿等主要施設の復元や遺構表示等の整備」のエリアとしている⁽¹²⁾。そこには整備された内郭北東隅建物（SB6405）が復元されている。その規模は東西 23.5m、南北 12.4m で天武・持統の飛鳥浄御原宮（672～694年）が想定されている。

つまり、天武もしくは持統天皇による「私的空間」域から見た神奈備山の景がもっとも映えており、二至二分の「日の出」の感動を体現できる最適地であるということになる。天武・持統天皇に関して、吉田孝氏によって次のような指摘が成されている。「天武・持統天皇の時代は、『日』のイデオロギーが鼓吹された時期であった。アマテラスを祀る伊勢神宮の地位が上昇し、皇位は『天つ日嗣』と観念されるようになる。そして、宮廷歌人、柿本人麻呂によって、『八隅知し 吾が大王 高照らす 日の皇子』（巻1・45など）という天皇を讃える定型が創始され、皇嗣として期待されながら早逝した草壁皇子（天武・持統の子）も『日双斯皇子』と讃えられた」とし、「日本」の国号はこのような天武・持統朝の「日」のイデオロギーの高揚を基礎としている、としている⁽¹³⁾。このような考説は、二至二分と天武天皇の関係が随分と深いものであったことを示すものである。

(2) 天武天皇と神奈備山と「日本」国号

「日本の国号」に関して、中国の正史『旧唐書』は「日本国」の項を立てて「日本国は、倭国の別種也。其の国、日の辺に在るを以っての故に日本を以って名と為す。或いは曰く、『倭国自ら其の名の雅やかならざるを悪み、改めて日本と為す』と」記している。また『新唐書』は「日本」の項で「〔天武〕死して子の総持立つ。咸亨元年、〔日本は唐に〕使いを遣わして〔唐が〕高〔句〕麗を平らげしことを賀す。後稍く夏の音を習い、倭の名を悪みて改めて日本と号す。使者自ら言う、〔国、日の出ずる所に近ければ、以って名と為す〕（下線は筆者記す）と記している⁽¹⁴⁾。

ここに見える「日の辺に在る」について、「日の昇る遠方」とする注釈もあるが（註14・166頁）、近年では「日の辺（本）にある国」とあるように「辺」を「本」と解しての研究が見える⁽¹⁵⁾。

そちらの理解の方がしっくりとくるように思われる。また、「日の出ずる所に近ければ、以って名と為す」というのも、要するに日本の王権の地理的環境から来る表現であり、それが国名になったと解せられる。遣唐使が唐側に伝えた表現に、我国が「日の辺にある」「日の出ずる所に近ければ」とあって、倭国・日本国内の一般的な理解がそこに示されている。これまで、国号について多くの考論が呈されているが、近年では「結局、日本という国号は、天武天皇十年三月の正史編纂（『日本書』をめざす）開始の中で公的に決定され、『浄御原令』

(天武天皇十年二月、律令編纂開始) で法的に公認されたものと考えられる」と説かれている⁽¹⁶⁾。

ここに天武天皇と国号「日本」との密接な関係性がうかがえる。私考するに天武天皇が、「日の本」を意味する「日本」を思惟した根本に、神奈備山の二至二分による「飛鳥カレンダー」による「時」への奉祀があったと思われるのである。天武天皇の日常に神奈備山を中心とする生活が溶け込んでいたようだ。持統天皇が、天武天皇崩御の時に作った歌に次のようなものがある。

○やすみしし 我が大君の 夕されば 見したまふらし 明け来れば 問ひたまふらし
神丘の 山の黄葉を 今日もかも 問ひたまはまし 明日もかも 見したまはまし
その山を 振り放け見つつ 夕されば あやに哀しみ 明け来れば うらさび暮らし
荒たへの 衣の袖は 乾る時もなし (巻2・159)

ここに歌われている「神丘」や「山」や「その山」はいずれも神奈備山を指している。要旨は、「天武天皇が、生前、朝な夕なにご覧になっていたのが飛鳥の神奈備山であった」といったものである。

IV. おわりに

ここに伝飛鳥板蓋宮跡での二至二分の観測からの私見を述べた。今日、地表面で「建物半立体」として復元整備されているⅢ—B期(飛鳥浄御原宮)の内郭北東隅建物(SB 6405)の南東角を観測位置としている。この建物は、天武・持統天皇の「私的空間」とされているもので、ここからは神奈備山(岡寺山)を真東に仰ぎ、春分・秋分にはその頂きからの日の出を奉斎し、夏至には山稜の北端から、冬至には南端からの日の出を奉斎することが出来る。夏至は高家のコル状稜線から、冬至は冬野のコル状稜線から太陽が昇る。それらは時には厚い雲層を押し分け、雲海を展開させて顕われ出て来る。私の知る限り明日香の天象は「風」、「雲」、「霧」、「日の出」いずれをとっても特別である。そして「東山」はそれら明日香の風土を構成する“役者たち”の舞台であるかのように見える。天武天皇はその一等地に私的空間を置き、「王権祭祀+王権を守護する神奈備山+二至二分(日の出)の太陽」から固有の「飛鳥カレンダー」を手に入れたようである。このような風土の中から「日辺(本)」や「日本」の国号が誕生したものと考えられる⁽¹⁷⁾。

けだし、管見にしてこれまでの「国号論」ではかかる明日香からの視点は見られないようである。また、私が2015年に行った二至二分の4度にわたる観測では、伝飛鳥板蓋宮跡で東の「日の出」を仰いでいる人は誰一人として見かけなかった。反面、明日香の地を

いつ訪れても西方の夕景を撮影する人に出会う。太陽も大きく真っ赤に見える。確かにその景は感動を伴っている。ただ、明日香の風土や歴史を探るときには「東方」の諸景を抜いては語れないと思う。

本稿が飛鳥の神奈備山の研究に、いくらかなりとも寄与するところがあれば嬉しい。推論や飛躍を重ねた箇所が多くあるかもしれない。これらについて識者のご教示やご批正を頂ければ幸いである。

註

- (1) 藤田富士夫「飛鳥の神奈備山の比定に関する実景論的考察」(『人文社会科学研究所年報』No.12, 敬和学園大学 2014年), 89～107頁。同「伝飛鳥板蓋宮跡から見た飛鳥の神奈備山について」(『野外調査研究所報告』第22号 NPO法人野外調査研究所 2014年), 50～62頁。同「明日香の神奈備山再考」(『季刊 明日香風』第133号 公益財団法人古都飛鳥保存財団 2015年), 15～20頁。同「飛鳥の神奈備山再論」(『野外調査研究所報告』第23号 NPO法人野外調査研究所 2015年), 72～80頁。同「飛鳥の神奈備山と二つの寺」(『考古学の諸相 IV』坂詰秀一先生傘寿記念会 2016年), 97～104頁。
- (2) 明日香村『整備された飛鳥の遺跡』飛鳥の考古学図録⑨, 2011年, 18頁
- (3) 林部均「伝飛鳥板蓋宮跡Ⅲ期の構造と変遷—後飛鳥岡本宮から飛鳥浄御原宮へ—」(『飛鳥文化財論攷』納谷守幸氏追悼論文集刊行会, 2005年), 96頁
- (4) 明日香村『飛鳥宮跡保存活用検討報告書』2014年, 45～55頁
- (5) 藤田富士夫「飛鳥の神奈備山再論」(『野外調査研究所報告』第23号 NPO法人野外調査研究所 2015年), 72～80頁。同「飛鳥の神奈備山と二つの寺」(『考古学の諸相 IV』坂詰秀一先生傘寿記念会 2016年), 97～104頁。この2本の論考に、本稿とは別の論旨でもって「日の出」の様子の一部を報告した。
- (6) 悪天候で観測が出来ない場合に備えて、『カシミール3D』の情報を事前準備したが、使用しないで済んだ。今回の観測では『カシミール3D』の正確さを測る目的もあった。その結果、日の出の位置や時間をかなり正確に示しており優れたソフトであることが分かった。
- (7) 和田萃『飛鳥』(岩波新書 2003年), 171頁
- (8) 辰巳和弘『『大槻』と『飛鳥』』(『万葉古代学研究所年報』第12号 奈良県立万葉文化館 2014年), 60頁
- (9) 小林達雄「総論 縄文ランドスケープ」(『縄文ランドスケープ』アム・プロモーション 2005年), 1～19頁
- (10) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注, 訳『日本書紀3』(巻二十七天智天皇十年) (小学館 2006年), 289～291頁
- (11) 上野誠『古代日本の文芸空間—万葉挽歌と葬送儀礼』(雄山閣 1997年), 65頁
- (12) 註4に同じ。
- (13) 吉田孝『日本の誕生』(岩波新書 1997年), 117～118頁
- (14) 引用は藤堂明保・竹田晃・影山輝国訳『中国の古典17 倭国伝』(学習研究社 1985年), 166・214頁に依った。なお、王朝が「日出ざる国」を意識した最初の記録は、『随書』にみえる。そこには隋の煬帝の大業3年(607)に倭国の王の多利思比孤が、使者を派遣してきたとある。「其の国書に曰く、『日出ざる処の天子、書を日没する処の天子に到す。恙無きや云々』と。帝、之を覽て悦

ばず、鴻臚卿に謂いて曰く、『蛮夷の書、無礼なる者有り。復た以って聞する勿れ』と。」(註14引用・156頁)これは、あまりにも有名で重要な記事である。これについては文字面から様々な解釈が論じられているが、いずれも明日香の風土からの視点が皆無である。筆者の視点については、いずれ稿を改めたい。

- (15) 西宮秀紀『日本古代の歴史3 奈良の都と天平文化』(吉川弘文館 2013年), 143頁
- (16) 小林敏男『日本国号の歴史』(吉川弘文館 2010年), 82～83・152頁
- (17) その最初は、推古朝による「日出処天子」の国書に見え、斉明天皇の川原宮の仮宮設置など、飛鳥王朝全体を通して培われてきた思想であるのは間違いないであろう。その一端は、川原寺や岡寺の建造にもうかがえる(藤田富士夫「飛鳥の神奈備山と二つの寺」(『考古学の諸相 IV』坂詰秀一先生傘寿記念会 2016年), 97～104頁)。